

ニューノーマル時代に求められる、“グローバル教育”の未来とは？ ～オンラインとオフラインを併用した国際交流プログラムから考える～



＜提言者＞池田 芳彦（文京学院大学 国際交流センター長・経営学部教授）

貿易取引、国際マーケティングが専門。研究テーマは、日系グローバル企業の事業展開。横浜国立大学大学院 国際社会科学研究所 企業システム専攻博士後期課程単位取得後、通産省・貿易研修センター助手、文京女子短期大学経営学科専任講師などを経て現職。主な著書に『国際経営を学ぶ人のために』（世界思想社、2001）『国際経営論：マーケティングとマネジメント』（学文社、2003）『グローバル経営』（同文館出版、2004）『貿易取引入門』（学文社、2013）『現代ビジネス用語辞典』（日本文芸社、2020）。主な翻訳は『マーケティングの国際化』（文真堂、フィリップ・カトーラ著）『東アジアの経営システム比較』（新評論、ミンチェン著）など。

◆国際交流センターについて

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に終息の見通しが立たない中で、大学が行う国際交流にも大きな影響が出ています。本学の国際交流も昨年度は外務省が感染症防止対策で渡航中止勧告を出し始めた2月以降からの予定がほぼキャンセルとなり、本年度についてはここまでのすべての海外渡航を停止しました。

我々の「国際交流センター」は、外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部の4つの学部を持つ本学において、国際交流をはじめとしたグローバル教育における学部間の調整や留学生のサポートなどを行っている機関です。各学部にて国際交流委員長がおり、月に一度、情報共有の場を設けて連携を図っています。現在も、来年度に受け入れ予定の交換留学生の対応をどうすべきかなど、日々刻々と変わる状況の中で様々な調整を行っています。

◆グローバル人材を育てる教育プログラム

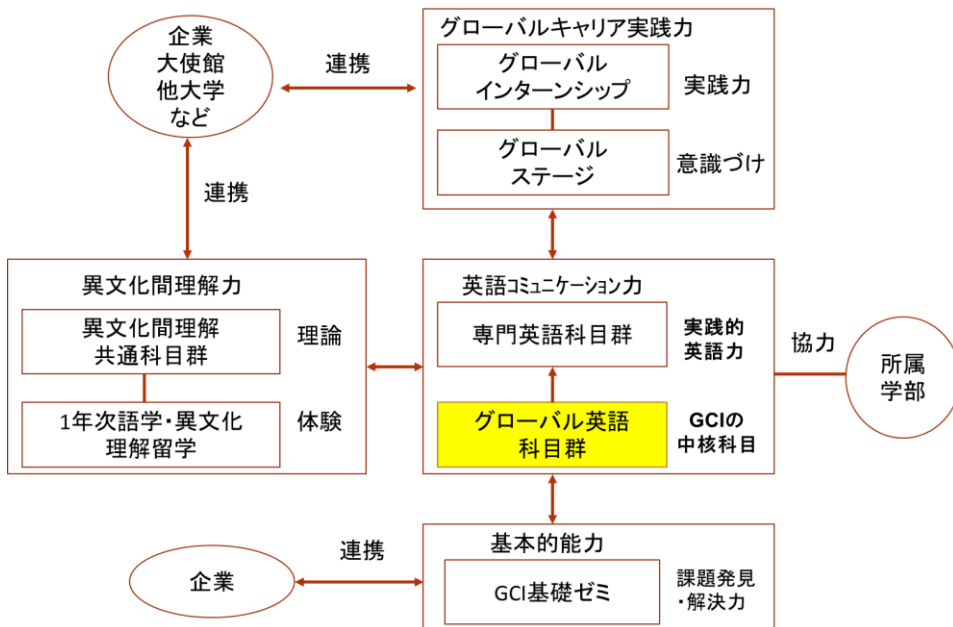
本学では交換留学や短期留学、海外短期フィールドワーク、海外インターンシップなど国際交流プログラムを積極的に推進しており、毎年200人強の学生が海外で行う何らかのプログラムに参加しています。在学している4年間の間に一人が一度、どれかのプログラムに参加していると仮定すると、約5,000人いる全体の学生のうち約2割が在学中に海外で何らかの学びの機会を経験していることとなります。

また、2013年度から全学部横断型のグローバル人材育成プログラム「Bunkyo GCI(文京グローバルキャリア・インスティテュート/以下、GCI)」を設置しています。これは単に高い英語スキルを持つ学生を育てるだけではなく、各学部で身に付けた専門知識や能力を国際的な舞台で活かすことのできるグローバル人材を育てることを目的としたプログラムです。

毎年80名ほどを選抜し、1年次は異文化理解の基礎的素養を身に付け、2年次以降は各学部の専門領域を英語中心の講義で学びます。グローバル教育においてこうした全学部共通の科目群を設けているのは、日本の大学の中でも珍しい例となっています。

このGCIの取り組みの一例に、1年次の夏に約1ヶ月間かけて行うアジア圏の大学への留学があります。この留学では英語や現地の言語、文化を学ぶほか、日系企業への訪問・研修、フィールドワーク、その国を代表する世界遺産や世界中から留学してきている学生との交流などを通じて、自身のアイデンティティを築くことを目的としています。

通常、「英語を学ぶ留学」と聞くと英米豪を思い浮かべることと思いますが、GCIではグローバルイングリッシュを掲げ、あえて非英語圏であるタイ、マレーシア、中国を留学先としています。なぜなら、異文化への理解を深めながら、話し手の文化を表現する国際言語としての「グローバル・イングリッシュ」のスキル獲得を主旨としているからです。非英語圏で英語を学ぶということに当初は反発も多かったのは事実です。しかし、留学先はいつでも世界中から留学生が集まっている大学で、参加者は様々な国籍の学生がいる環境の中でグローバルな英語を学ぶというプログラムは今では、高く評価されています。



GCIカリキュラムにおける各科目群の有機的な繋がり



アジア圏で実施する海外プログラムの様子

例えば、留学先の一つであるタイのタマサート大学でインタビュー撮影の時でした。タマサート大学の学生はカメラの前で何の躊躇もなく英語で応えます。その光景に、同じくネイティブスピーカーではない本学の学生は衝撃を受け、視野を広げるきっかけになるのです。入学から4か月後の1年生をあえてそういった環境に置くことで、早い段階から国際的なコミュニケーションスキルを身に付けるのです。

◆国際交流のオンライン化

海外に容易に渡航ができない現状において、大学の国際交流もオンライン化が進んでいます。特に海外の大学の中には先進的な国際交流事業を行っているところも多く、本学と提携関係を結ぶ大学からもオンラインを活用した留学プログラムの提案が数多く届いていて、海外の大学の方がそうした動きに積極的な印象を受けます。本学でも既存の国際交流をオンライン化した取り組みが始まっており、そのひとつが「オンラインチャット・ラウンジ」です。



学内にあるチャット・ラウンジの様子

外国人が常駐し、学生が好きな時に会話ができるチャット・ラウンジというオープンスペースを本郷とふじみ野の両キャンパスに設けてきました。カンパセーションパートナーは本学や近隣の大学に留学中の院生などをお願いしており、少数で自由な環境の中、学内にいながら語学力を磨くことができます。このチャット・ラウンジも新型コロナウイルス感染症防止に伴う入構制限によって休止していましたが、5月からはビデオ会議ツールを活用して再開しました。始めてみて意外だったのは、オンラインになったことで今までチャット・ラウンジに来ていなかった学生の参加が増えていることです。また、リア

ルに直面するよりもオンラインの方が話しやすいと感じる学生も多いようです。そのほかにも交換留学提携校であるアメリカのセント・ジョンズ大学とオンライン交流を企画したり、学内の留学生と交流するオンライン国際交流会を開催したりと、あるいはGCIの一環である海外インターンシップにもオンラインの仕組みを取り入れたり、少しずつ新しい取り組みが始まっています。



オンラインチャット・ラウンジ実施の様子

◆オンライン国際交流の課題と未来

いわゆるアフターコロナと呼ばれる世界においても、国際交流へのオンラインの活用は進んでいくでしょう。日本と海外という物理的な距離がなくなって、今までできなかったことがどんどんできるようになるはず。その一つ、オンライン留学は費用的な面を考えてもメリットが大きいと思います。本学でも2021年2月後半から3週間の短期オンライン留学プログラムが始まります。昨年まで授業料・渡航費・滞在費も含め50万弱でしたが、オンライン留学は7万円弱です。提携先校の協力の基、本学オリジナルプログラムで実施します。3週間のうち、ライブ授業は火曜日～金曜日の2時間、週8時間程度ですが異文化コミュニケーションの授業では、現地学生と一緒に学ぶプログラムが組み込まれています。

しかしながら、すべてがオンラインでいいかといえば必ずしもそうではなく、実際に現地に足を運ばなければ分からないことも数多くあると思います。例えば、私は毎年、学生をバンコク最大のスラムに連れていくのですが、現地で感じる熱や匂い、廃棄物の上に作られた地面を踏み締める感覚はやはり現地で五感を

使わなければ体験できません。理想的なのはリアルとオンラインのどちらかということではなく、それぞれの良さを活かしながら選択肢を増やしていくことだと思います。

先に述べた語学・異文化理解プログラムのほか、2010年から「新・文明の旅」プログラムなど、欧米以外の国々に目を向けているのが本学の国際交流の特徴です。ウズベキスタンの大学との交流事業についての話し合いも近々スタートします。

今後、オンラインの活用がさらに進めば、日本と海外の教室を結んで、学生同士がリアルタイムで同じ講義で学ぶというような可能性も出てくるのではないのでしょうか。特にアジアの国々とは時差が少ないので、実現へのハードルが低くなってきていますし、そうした機運が高まってきているのを感じます。

この感染症の終息は予想がつかません。その一方で近いうちに画期的なワクチンが開発されて一気に終息するかもしれません。これだけ不確実な状況ですから、私たち国際交流センターとしてはあまり先ばかりを読まずに、どのような状況になっても対応できるよう、フレキシブルに取り組んでいきたいと考えています。

VIRTUAL BSIS 2021

COURSE DESCRIPTION

INTERCULTURAL COMMUNICATION

In the intercultural communication class, students will develop skills (verbal and non-verbal) for academic and professional settings that allow them to effectively communicate across cultures. This class will include theory and practical application through collaborative student projects and interactions. This class will be synchronous and asynchronous. 2 hours of assigned project work weekly.

JAPANESE

This is an opportunity for practice that allow the students to apply the skills they have learned in a practical and academic setting by assessing and addressing the needs of a client (i.e. the Japanese language learners) and communicate effectively across cultural boundaries. This class will be synchronous and asynchronous. 2 hours of assigned project work weekly.

ESL

This class is a combined skills course integrating acquisition of and improving an key skill areas of English. This class focuses on pronunciation, discussion, and increasing listening and public speaking skills and strategies with an intensive focus on vocabulary development. Special emphasis on recognizing and pronouncing many of the most common words in English. This class will be synchronous. 2 hours of assigned homework per session (6 hrs weekly).

CULTURE

This course is designed for nonnative English speakers interested in the American culture and why Americans behave and think the way they do. This class will be primarily a discussion-based format with supplemental readings and film clips. Students will receive journaling homework. This class will be synchronous. 2 hours of assigned homework per session (6hrs weekly).

MOVIE

In this course we will use English-speaking films to dive deep into the American culture. Students will watch at least one film per week and come to class prepared to discuss. The class aims to dissect the films beyond plot narrative and make connections to American and Japanese society. This class discussion will be synchronous. 2 hours of independent movie watching outside of class per session (4 hrs weekly).

COLLEGE OF Saint Benedict Saint John's UNIVERSITY Center for GLOBAL EDUCATION

2021年に実施するオンライン留学募集要項

<文京学院大学について>

1924年、創立者島田依史子が島田裁縫伝習所を文京区に開設。建学の精神「自立と共生」のもと、先進的な教育環境を整備し、現在は、東京都文京区、埼玉県ふじみ野市にキャンパスを置いています。外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部、大学院に約5,000人の学生が在籍する総合大学です。学問に加え、留学や資格取得、インターンシップなど学生の社会人基礎力を高める多彩な教育を地域と連携しながら実践しています。

本レターでは文京学院大学で進む最先端の研究から、社会に還元すべき情報を「文京学院大学オピニオン」として提言します。